

## 幕末明治の写真師列伝 第七十一回 武林盛一 その二

亀蔵は元来手先が器用であったことから、屑板を集めて苦心惨憺、暗箱を自ら造り、虫眼鏡を重ねてレンズの代用として、不恰好ながらとにかく写真機らしき物を組み立てた。この間、「所謂切支丹伴天連の邪法に腐心するは、宥し難き国賊なり」と養父からきつく叱られたという。そのため苦心して作った暗箱を破棄されるようなこともあったが、亀蔵は屈することはなかった。亀蔵の養母（実際は養祖母）はこの頃に亡くなった。武林夢想庵『むそうあん物語』によれば、五稜郭に近い神山村の浄土寺無量庵に、亀蔵の手蹟による「武林亀蔵の母」と刻まれた小石塔があるそうだ。

明治2年（1869）、箱館戦争の騒乱中、亀蔵は榎本武揚の下で箱館戦争参加、官軍へ降伏した後は、五稜郭を出ると、一時、杉山という人の役宅に居た。その後は、開拓使等外吏となり、刑法局附属の囚獄課勤務を命じられる。

開拓使は明治維新後にそれまで徳川幕府直轄下にあった蝦夷地開発を主な目的として明治2年（1869）に設置された。この開拓使の本庁は明治2年（1869）7月8日に民部省内に置かれ、8月には太政官直属となり、他の各省と同格として開拓使を置いた。開拓使は8月15日に蝦夷を北海道と改めて、北海道内を11の国と86郡に分けて、同年9月に函館の御殿坂（基坂）上に出張所を開庁した。そして翌明治3年（1870）閏10月、在京の開拓使庁を東京出張所にして、逆に開拓使本庁を函館に移している。その後、明治4年（1871）4月に札幌の仮本庁舎が竣工すると、翌5月、この札幌開拓使庁を本庁とした。さらに翌明治5年（1872）には、札幌開拓使庁を「開拓使札幌本庁」と改め、函館（「箱館」は明治2年（1869）に「函館」に改められたといわれているが、正式には明治9年（1876）4月24日付になる）、根室、浦河、宗谷、樺太に5支庁を置いている。

明治2年（1869）9月25日、第二次開拓長官として東久世通禧が函館に着任し、この東久世が写真の記録性に注目して、同年（1869）12月15日に音無榕山（後の田本研造）などに写真のテストを命じている。これは開拓使では各地の開拓、建設工事の状況を政府に報告するには、写真が最も適していたからである。そのため開拓使では写真師を求めていた。東久世通禧『東久世通禧日録』によれば、これ以降、明治3年（1870）1月2日、8月25日、26日、9月1日、明治4年（1871）1月7日、3月11日、5月22日と「写真技ヲ為ス」と記されている。

おそらく亀蔵が音無榕山（後の田本研造）と出会い、音無榕山の弟子になったのはこの頃のことであろうであろう。音無榕山（後の田本研造）は明治元年（1868）、叶同館（現函館市元町東本願寺別院）附近で露天写場を開業して、同年（1868）会所町に移り写真館を開業していた。

明治3年（1870）3月、亀蔵お退官する。このことは、次の明治3年（1870）3月付、武林亀蔵自筆の進退届（北海道立文書館蔵、簿書〇〇一五八）で確認できる。

「私儀願之通職務御差免ニ相成難有仕合奉存候 従而御布告之通士躰ヲ脱シ天神町人別ニ入写真所ニ相成依之此段

奉願候 午三月 武林亀蔵

さらにこれは、亀蔵が函館天神町に於いて写真所を開いたことを示している。しかし、開業したばかりの明治4年（1871）9月2日、亀蔵は常盤町からの出火で、戸数1714、土蔵その他106棟を焼失する大火に遭い、写真館が丸焼けになり営業ができなくなってしまった。このため亀蔵は開業した際の経費200円の借金も背負うことになる。

先にも記したが明治4年（1871）4月に札幌の仮本庁舎が竣工すると、東久世通禧は函館から札幌に移り、翌5月には早くも写真をやっている。さらに8月には函館から音無榕山（後の田本研造）を札幌開拓に呼んで、撮影を命じている。このことは北海道立文書館蔵『明治四年 札幌往復』の公文書で判る。その詳細については佐藤清一『函館文化発展企画1 箱館写真のはじまり—幕末から明治』（五稜郭タワー株式会社、1999）に書かれているので、そちらをご覧ください。

明治4年（1871）10月15日、東久世通禧は侍従長に転出することになり、函館から東京に戻るようになった。後任は薩摩藩の黒田清隆である。

借金を背負った亀蔵は新しく北海道の開拓の拠点となった札幌へ出稼ぎに行くことにした。この頃の札幌は、戸数550、人口1500余人に過ぎないとはいえ、北海道の首府として一大都市を建築して、全北海道の開拓警備の中心都市として諸般の施設、官舎、一般住宅の建築が盛んに行われていた。そのため東京からも多くの職工が集まり、本土各地からも数多くの移住民が集まって繁栄していた。

札幌に来た亀蔵は最初、南一条東二丁目の高橋旅館に泊まり、ここで営業を開始しようとしたが、高橋旅館ではそれは許されず、そのため南一条西三丁目の脇本陣に移ることにして、この札幌脇本陣の取締役で、後に自分の門人となる三島常磐の父、吉野民次郎の世話になり、その便宜を得て、適当な一室を借りて写真館としての営業を始めることになった。札幌は前記の様に繁栄した発展途上の大都市であったので、開業当初より亀蔵の写真館は大好評で、多くの客が集まり大盛況となり、亀蔵の予想以上の収益を得ることが出来た。このため亀蔵も旧債を悉く返済することが出来た上に、それ以上の蓄えも得て、家運も挽回し当初の目的を達することが出来た。

明治5年（1872）、亀蔵は再び函館に戻ろうと考えてその準備もしていたのだが、この頃、亀蔵は吉野民次郎から度々、開拓使御抱写真師になることを勧められて、その斡旋で明治5年（1872）5月に開拓使御抱写真師になることにした。月給30円を給与せらる御用掛（開拓使御抱写真師）として開拓使本庁に勤務することになり、それと同時に南三条西五丁目の新長屋と称する官舎の一戸を賦与されることになった。これはこの当時の開拓使が技芸のある者はその技芸が何であるかを問わず、札幌繁栄のための一法として雇い入れていたため、亀蔵もその奨めに応じたものと思われる。（森重和雄）